

歴史教育における戦争学習と民衆の抵抗の取り扱い

～ドイツ・「白バラ」抵抗運動の教材化を手がかりに～

塚本 徹*

1. はじめに

「過去に目を閉ざすものは現在に対しても盲目となる。」⁽¹⁾ ドイツのヴァイツゼッカー前大統領はかつてこう述べた。歴史教育は過去に目を開くためにも重要であり、なかでも近現代史は市民革命、産業革命、帝国主義、世界大戦と錯綜する政治的・経済的・社会的変革の中で、民衆の自由・権利の獲得、戦争と平和、民族の自決・独立、国際平和の追及などがドラマティックに展開され、今我々が生きている現在に引き継がれつながらっているという意味で重視されてしかるべきである。

そのような近現代史を生徒たちが生き生きと自分自身のものとして把握できるためにはどのような角度から迫っていけばよいだろうか。この疑問に対し、民衆の視座から捉える「民衆の視点からの近現代史の見直し」が当てはまるのではないかと考えた。革命を取り上げたときなど、そこに登場する民衆の力は決定的で、指導者の役割も重要だが、それはいかに民衆の要求を汲み上げ、組織し、適切な方針を提起するかという点にかかっている。革命のような大きな変革の場合には、「民衆が歴史を動かす」という実感を教師も生徒も受け取ることができる。しかし新たに「それまでの間、民衆はどうしていたのか」という疑問も出て来て、これに対し「じっと我慢をしていたのだろう」という答えでは生徒は納得しえない。苦しい生活に耐え、圧政に耐えてきた民衆が「ついに立ち上がる」のが革命、というのでは歴史を表面的にのみ捉えることになってしまう。「いつもはじっと耐えていて、ある時突然立ち上がる」という民衆像は克服されなければならない⁽²⁾。「近代化」という優れた革命的な変革を、民衆は無条件に肯定しているのではなく、また無抵抗無自覚に受け入れているのでもない。そのとき民衆が何を求め、また何に対して抵抗していったのか、そして何を失い、何を獲得していったのかを具体的な授業の中で浮き彫りにしたい。民衆を主役に押し立てた歴史教育の展開にこそ、生徒は感動を得られるのではないか。

20世紀は革命の世紀であると同時に戦争と平和の世紀でもある。二度の世界大戦はこれまでと比べものにならない莫大な犠牲者を出した。戦争は人類にとって避けるべき、克服すべき最大の課題であり、近現代史を教える中で、戦争と平和の問題はどうしても中心になってくる。しかるに歴史教育、特に戦争学習において、民衆の主體的な姿勢に着目する意義を考察しようと考えた。「戦後50年」を迎えた今だからこそ第二次世界大戦を取り上げ、ファシズムについて教材化を図る意義がある。戦時下において民衆はいつも「じっと耐えて」いたのではない。ただつき従って加担したのでもない。戦争に反対し、ファシズムに抵抗した人々、民衆は確かに存在し、また彼らは特別な人でなかった。

抵抗運動の多くは失敗に終わったけれど、結果の如何に関わらずその姿勢は戦後につながるものを持っていた。彼らの存在・思い・行動について大いに教えたい。彼らの姿勢に平和への真の勇気・主体性を生徒に学び取らせたい。民衆の視座から、そして「抵抗」の視点からの学習を通

* 静岡県立藤枝養護学校教諭

して、先人の努力・知恵・犠牲に深く学び、戦争を阻止し、平和を確立する意義を、とりわけ21世紀に生きる若い世代にしっかりと教え伝えたいと思っている。そこで、世界史教育における「ファシズム・第二次世界大戦」についてどのように扱っていくかの視点を提示し、教材研究を踏まえた上で実際に研究授業を实践することとした。

2. 日本における戦争学習と民衆の取り扱い

日本国民の犠牲と、アジアの人々の命を奪ったその反省から日本国憲法が生み出され、またその体験が戦後への願いの基底となってきたことを考えれば、わが国の十五年戦争⁽³⁾の学習こそ平和教育の基軸となるべきものとして捉えられてきたのは当然である。その学習には依然多くの課題が残るといわれるが、基本的には十五年戦争学習は「語り継ぐ戦争体験」から「問いかける戦争学習」へと転換してきた⁽⁴⁾。つまり「被害」の面のみならず「加害＝侵略」の事実をふまえ、さらに民衆の「加担・抵抗」の視点をおさえた三つの側面からの戦争学習である。近代日本史の中に十五年戦争を正確に位置づけ、それがいかなる歴史過程の中から引き起こされてきたのかを明らかにし、その侵略戦争がいかなる論理によって正当化されてきたのか、国民はどのようにして加担させられ、またどのように抵抗したのかを問いかける。戦時下の抵抗は「少数の」という量の問題ではなく、質の問題として捉えその民衆像を強調する。これは戦争の被害者でありながら、反対するすべも知らなかった民衆というのではどうしても「8.15以後の自ら歴史を創る民衆」⁽⁵⁾とはつながらず、戦時下の国民の意識の中にあったもの、どこかで歴史の進展を促すような、大きな力になるものが国民の内側にあったことを捉えさせることを目的とするからだ。またアジア蔑視の認識を生み出すのを防ぐために、アジア諸国に対する加害の事実を明らかにし、これに対してアジアの民族・民衆がどう闘い、勝利したかを明らかにする。日本のアジア支配の実態とアジア諸民族の抵抗の中からは、「アジア太平洋戦争」⁽⁶⁾の本質を問いかけることができ、あわせて加害と被害、加担と抵抗の問題を問いかけながら戦争責任の問題へとつなげられる。被害の事実からは戦争の悲惨さと平和への願いが、加害の事実からは戦争への怒りと戦争責任の問題が、そして加担と抵抗の問いかけからは今日の我々自身の生き方が問いかけられる仕組みになっているということができよう。

しかし「被害・加害・抵抗」の視点に立って戦争認識を問い直し、その視点から戦争学習がなされなければならない、という提起がなされて久しいのに、「抵抗」の視点を踏まえて学習が展開されている実践例は少ないという。「抵抗」の視点を抜きにして現代史学習を展開するならば、生徒たちに偏った歴史認識を植え付けるだけでなく、自らの生き方に対する無力感・虚無感を増幅させることになってしまう。「抵抗」の視点を抜きにして「加害」の事実だけが提示されれば、自国への嫌悪感と被害者であった相手国への蔑視感を育てることにもなりかねない。また「抵抗」の伝統を知らずしては、今日の日本国憲法の平和・人権・民主主義に対する理解は浅薄となり、現代認識をも歪めてしまうおそれさえ出てくる⁽⁷⁾。「抵抗」の学習をすすめる有効性は以下のように換言できよう。

- ①「聖戦の論理」の欺瞞性が明らかになり、それは「侵略の論理」でしかなかったことが明らかになり、歴史の真実に迫ることができる。

- ②「抵抗者」が「抵抗」したもの、「抵抗者」を弾圧したものが、侵略戦争や植民地支配に対して闘った民族的な抵抗と「共通の敵」であったことが明らかになり国際連帯への目が開かれる。
- ③先人たちの闘いを通して、今日の平和・人権・民主主義の持っている「価値」があらためて実感させられる。
- ④厳しい弾圧に抗して反戦・平和のために生きた人々の生き様を通して、ややもすると現実に流され、自らを失いがちな日常性を省みて、自らの生き方が問い直される。⁽⁸⁾

侵略戦争に対する「抵抗」の意義を問い直し、「抵抗」の「思想」を通して、国家のあり方や人間としての生き方を学んでいくことができると予想される。無論「抵抗」だけを取り出すのではなく、戦争学習全体の中に「抵抗」を捉え、また「被害・加害」の視点も踏まえたうえでその学習がすすめられなければならない。しかし「抵抗者」が示した「歴史への主体的なかかわり」「良心の叫び」「不屈のたたかい」を抜きにして歴史を学習するとき、生徒たちは歴史の真実に触れることなく、歴史への感動を失い、自らの生き方にも無力感を植え付けられることになってしまう。自国を愛し、国家のあり方がどうあるべきか、そして人間としての生き方がどうあるべきかを真剣に問い詰めた人たちだからこそその「抵抗」である。よって「抵抗」の視点を重要視して戦争学習をすすめることは「国際社会に主体的に生きる民主的、平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う」ことに有機的につながると考えられる。

3. 「白バラ」抵抗運動の歴史的展開

(1) 「白バラ」のキリスト教的思想

「白バラ」抵抗運動とは、ミュンヘン大学の学生を中心としたグループが1942年の夏から43年冬まで、具体的には六種のパンフレットを作成・配布して反ナチを訴えた活動を指す。最終的に彼らは逮捕され処刑（斬首）され、その試みは「挫折」に終わった。

「白バラ」においては、いかにしてどのような抵抗が行われたのかという問いよりも、なぜこのような抵抗を行ったのかという問い、つまりこの運動の根源と、運動を推し進めた究極の原動力を求めての問いの方を重要視したい。そしてこの運動の結果は「挫折」と捉え、それはまた当然の帰結であったとも考える。「白バラ」はキリスト者の抵抗であり、政治的運動ではなかった。それが彼らの運動の限界であり、挫折の主要因だった。

グループの一員であるヴィリー・グラーフの日記、書簡を取り上げると、1942年6月の妹への一連の手紙には、単にキリスト教徒と呼ばれるのではなく、真のキリスト教徒たろうとする彼の決意が見られる。

「とにかく、本来、すべての行為に意味と価値とを与えるものは、同じ見解をもつゆえに、ともに生きていける人間が存在することだ。……しかし、様々な方向を見分けることは非常に重要だ。それは、僕が不遜にも、唯一の正しい道を進むことができるということの意味するのではない。しかしたとえそれが実際には容易でないとしても、僕は少なくともその道を自分のために認識しようと思う。キリスト者となるのは、多分最も難しいことだ。なぜならば僕達は絶対にそうはなれないし、たかだか死において、わずかにそうなることができるものだからだ。(1942年6月15日、妹アンネリーゼ宛の手紙より)」

また彼にとって東部戦線でのロシア体験は決定的なものになり、自分を含めてドイツ人の為したこと、また見たことの無意味さをつくづくと感じとった。今ここで行われていることの無意味さは、グラフをして、真の人生の意味を獲得するための実践とは何か、の問いを差し迫ったものにしたのである。彼は考えぬき悩みぬいたあげく、「白バラ」として抵抗運動への参加を決意した。抵抗運動に関わりながら、一方で神学・宗教に耽り、自己の行動について内面的に反省を重ねた。そして疑いと確信との間を何度か迷いながらも、ついには断固たる抵抗運動への道へ踏みきっていく。彼のこうした姿勢にこそ、「キリスト者」たろうとした学生たちの抵抗という、「白バラ」の思想の本質がうかがわれる。

また彼らの活動を示す六種のパンフレットを分析すると、特に第1号から4号までの四種が後の二種と比べ具体的・政治的な内容を欠き、倫理的・理想主義的な性格が顕著に出ていることに気付く。終末論的・黙示録的表象が描かれていることに、パンフレットが無条件に反ナチ的性格を持っている、との指摘だけでは十分でなく、ロマンティックに響くパンフレットの調子を分析しなければならない。学生たちはナチズムを政治的に理解しようという試みを全くせず、ただ黙示録的な光景を描きながら言及しているに過ぎない。そしてパンフレットはその筆者が連帯感情をもつ人々、すなわち「キリスト教的西欧的文化を担う一員(第1号)」「キリスト者たる君(第4号)」と書くことができる相手に対して作られたものだった。パンフレットは教養あるキリスト教徒に向けられたものであり、このような精神的エリートたちの連帯感情を強め、再発見しあうことがパンフレット行動の目標であった⁽⁹⁾。その場合、学生たちはこれらエリートたちが一般に宗教的・道徳的な立場から抗議すれば、アンチ・クリストの支配を最後の瞬間に倒し、それによって「もう一つのドイツ」の生命力がまだ破壊されずに残っていることを証明できると確信していたのだった。その意味で「白バラ」のパンフレット行動は、組織的ではなかった。

(2)「白バラ」挫折の要因

「白バラ」の学生たちが属していた「もう一つの」市民的なドイツ、この文学的・人文的な市民階級とナチ主義者との間には、一切のコミュニケーションを不可能なものとする深い溝があった。一つのドイツと、家庭や小グループの中で「内的価値」を養うことに専念して「わけのわからぬ、ますます縁遠いものとなってゆく機構」⁽¹⁰⁾から離れていようと努めるもう一つのドイツとの間は、橋渡しのできない断崖で隔てられていた。よって「白バラ」が強くキリスト教と結びついた場合、その「非政治的」な抵抗運動の運命には、政治的になろうとすれば孤立へと向かう必然的な進路がはっきりと映し出されていた。

「白バラ」を生んだ教養あるドイツ市民階級「もう一つのドイツ」は、ナチによって生活の「政治化」を要求されただけにますます、自分たちの存在を非政治的なものと理解した。従って、ナチズムの敵である市民階級にとって「政治的」とは「非道徳的」と同義であり、逆にナチにとっては「道徳的」すなわち「非政治的」の付加語は「弱い」という意味を持っていた。彼らの行動はこの非政治的な「もう一つのドイツ」の限界を示していた。ここに「白バラ」の限界、つまり挫折の内的要因を見て取ることができよう。

一方、外的要因にはナチス＝ドイツのファシズム体制が挙げられる。ファシズム体制の特質については歴史学の成果に基づき、「一党独裁とそれを可能にするための《強制的同質化》と呼ば

れる画一的で全面的な組織化の強行」⁽¹¹⁾と捉えて考える。自由主義的諸権利の全面的抑圧と政治警察を中核としたテロの全面的制度化という、権力と精神世界の一元化をナチスは図った。結果、その体制下にある国民は一様に「同質化」、強制的に動員させられ加担したのである。学生たちが敢えて抵抗したその体制は余りに大きすぎた。

「白バラ」は彼らの時代に対して、人格的・道徳的高潔をあらわす最高の標識を打ち立てたといえる。しかしそのモラルが高かっただけに、政治的な効果を持ちえなかったことはますます我々の心を痛ましめる。道徳的な行為としての「白バラ」を、我々の歴史から消し去ることはできない。

4. 研究授業『ファシズムと「白バラ」抵抗運動』の実践

(1)教材化の視点

「白バラ」の学生たちはナチズムの非道な政治に対して沈黙している人々、知らず知らず強制的に同質化されていった人々に対し、その意識を覚醒した。パンフレット第2号に見られたその厳しい文句は今日の戦争責任の問題とも大きく関わるものとなっている。

「なにゆえにドイツ民族は、これらすべての、残忍非道を極める犯罪を目の前にして、かくも無感動であるのか？……感じなければならないのは、単に同情のみではない。それよりもはるかに大きなもの、すなわち同罪を感じなければならないのだ。なぜなら、ドイツ人はその無感動の態度によって、彼ら凶悪の徒に、そういう行動をする可能性を与え、かくも果てしない罪を背負い込んだこの『政府』を許容しているからである。……だれもが有罪、有罪、有罪なのだ！」

彼らは自らの行動の基準を外権に全く求めることなく、徹底的に孤独な思索のうちにペシミズムを克服する内的確信と厳しい掟を自ら生み出し、それらに従って最後の一瞬まで誠実に真剣に生きた。その生きざまゆえに我々は胸を打たれ、学ばされる。しかし必要以上に「白バラ」を過大評価し、強調してはならない。抵抗運動については、その輝かしく勇敢な抵抗者の姿を描き出すことよりも、敗北と、抵抗の不可能性について想いをこらすことの方が重要になる。様々な信念や確信に基づく抵抗は、暗黒時代の稀有の遺産として伝えられ生かさなければならないが、プラスの面のみを強調しては人並み外れた英雄的な闘志の像を生み出すことに通じ、疑念とためらいを覚えながらそれを行為に移す道を容易に見出しえなかった多くの人々の姿を覆い隠すことになってしまう⁽¹²⁾。現在の我々、また生徒たちにとって重要なのは、ファシズムに対する抵抗の実践よりも、その抵抗を生かし継承することである。そしてそれにもまして重要なのは、抵抗がなぜに敗北し、あるいはそもそも不可能だったのかを問うことにある。

環境・状況・運命というものにただ流されることなく、それらに対して自分の自由意志で立ち向かっていくことは難しいが大切なことである。周囲に押し流されることなく、自分の確固たる意見を持つこと、厳しい個人の意識改革をすることの必要性、そしてそれに向かう勇気を「白バラ」から、その挫折から学びとることができるのではないか。知らないうちにファシズム体制が出来上がっていたということのないように、自分の置かれている状況に目を光らせ、個人の内的確信に基づいて自由への意志を常に示す・主張できるだけの強さを、我々は養わなければならない。世の中の動きに無関心でいることなく、よりよい方向へと変革していく努力を惜しまない

態度を身につけたい。それこそは「公民的資質」という社会科の究極目標につながるのではないかと考える。

それらを踏まえ、「白バラ」抵抗運動を教材化する視点を以下のように設定した。

- ①ファシズム体制とはどのようなものか。体制下におけるナチス＝ドイツでは、ほとんどの人々が押し流され、強制的に「同質化」させられていった。それを踏まえたうえで、その中でも断固それを拒み抵抗した人々がたしかに存在したことを知る。
- ②「白バラ」のメンバーたちは20代の若者・大学生であった。彼らは何を想い、なぜ抵抗するにいたったのか。若者の意識を共感したい。（感性的認識：日常化の問題）
- ③なぜ「白バラ」は失敗・挫折に終わったのか。その原因を考える中で彼らが立ち向かい、押しつぶされたその体制とはどのようなものであったのか。ファシズム体制について再び考察し、その理解を深める。（科学的認識：内面化の問題）
- ④それでは彼らの行ったことは無駄だったのか。その「無駄」を超えるために「白バラ」を民衆の抵抗として、レジスタンスという広い枠組みの中で考えることによって、その意義を見出し彼らの姿勢に学んでいく。（実践的認識：主体化の問題）
- ⑤自己の意見をはっきりと持ち、自分で考え、行動する態度を、周囲に流されない自己を確立する。それによりファシズム的傾向を事前に察知してファシズム化を阻止する態度、世の中をよりよい方向に変革していく努力を惜しまない態度を身につける。（最終目標）

(2)授業の計画と評価

研究授業は平成6年10月に、以下の試案に基づき2時間の構成で実践した⁽¹³⁾。

第1時：【ドイツ・ファシズムの成立とナチス体制下のドイツ】

- ①ファシズムが台頭してきた過程とその背景について概観する。
- ②ファシズム支配とはどのようなものであったかを多角的に考察する。

第2時：【ドイツ・「白バラ」抵抗運動】

- ①「白バラ」の若者がなぜ立ち上がったのか、その経過をたどりながら共感する。
- ②「白バラ」抵抗運動が挫折に終わった原因を考える中で、ファシズム体制の性格について理解を深める。
- ③「白バラ」の今日的意義を、大戦下の各国のレジスタンスと関連づけて考察し、戦争と平和についての意識を高める。

授業実践の際は、生徒たちにアンケートを課し、その最後で「戦争と平和」について自由記述させたが、その中の代表的な意見を取り上げて授業の評価に代えたい。

多くの生徒は「白バラ」の若者たちに共感し、彼らの存在とその行動とに感動と驚きを持って捉えている。しかも、生徒たちは自分の状況に比べる形で捉えようとしている。

A：「白バラのメンバーの考えていたことは、政治的権力や雰囲気流されることなく、自分たちの正しいと思う方向へ進んでいこう、ということだと思った。結果としてそれが挫折に終わったとしても、そういった考え方が流される生活をずっと続けてきた民衆に新しい風を送ったのは確かだと思う。」

B：「私達と年齢のかわらない人々が、現実を正確にみつめて、自分達の主張を大事にし、最後

までそれをつらぬいたと知ったときにはすごいと思った。」

なかには「白バラ」が挫折したのを受けて、その結果を冷ややかに見つめる生徒も存在する。しかし、挫折しながらも「白バラ」の行ったことには意味があったのだとし、その意義・影響について積極的に見出すような授業の展開を受け、生徒の何人かは確かに「無駄だった」の思いを超え、その意義を認めようとしている。

C：「平和はすぐ身近にあるようで気をぬくと去ってってしまうような不安定なものだとわかりました。…私たち1人1人がしっかりとした意見を持ってこれからの未来をつくりあげなければいけないと思いました。」

D：「こわいとかそれだけじゃなくて、自分からはたらきかけることで、新しい世界、平和とか、自由とかそういったことをつくっていくということを知った気がします。」

生徒たちは「白バラ」を身近な問題として捉え、その行動より自分の意見を持つ大切さを知り、さらには平和へ向けての努力という点についても意識し始めている。こうした生徒の生き生きとした意見から、授業が彼らの主体形成を促したと見て取ることができるのではないかと。しかし一方では、授業の問題点を浮き彫りにするような意見も出た。

E：「今日気になったのは、『なぜドイツ人を優秀としたか』ということ。先生は別に優秀ではないと答えていたが、私は優秀な民族だと思う。同じように、ユダヤ人がなぜ迫害されたのかという問題もある。特異な民族であるが彼らもたしかに、特別優秀な民族である。だからこそ差別されたのではないだろうか。私は日本人だから、日本人も優秀な民族だと思うし、同胞を尊ぶとか、愛国主義とかは、誰でももつ感情だろう。誰もが自分の民族を優れているとするだろうし、優先しようとするだろう。だから、お互いにどのように認めあっていくかということは、とても問題だと思う。」

この意見からは授業に「民族」という視点が欠けていたことが露呈する。また「権力」といった用語も生徒の文章の中に多く見られるが、彼らの意見を読む中で、必然と授業により幅の広い視点、別のファクターを取り上げる必要性が見い出される。「戦争と平和」というテーマに関しても同様であり、以下の意見には盲点をつかれた気さえた。

F：「『戦争と平和』という言葉がよく対になって使われているが、戦争というものが絶対に悪なのだろうか。…戦争も見方を変えれば、現状を打破するための手段の1つにすぎず、善・悪の判断を下すということではできないのではないだろうかと思う。」

5. おわりに

授業では「白バラ」抵抗運動を民衆の抵抗運動として捉えて学習することにより、生徒のファシズムに対する興味・関心を高め、その体制についての理解を深めることはできた。しかし生徒の戦争に対する認識については学習後もそれほど変わらなかった。平和というテーマについても深く考えさせるきっかけとなり、何人かの生徒は自分の意見を持つことの大切さと平和へ向けての努力の必要性を意識し始めたものの、一方で別の見方をする生徒も出てきて、「白バラ」から平和について考えさせるのに少々無理があったともいえる。その点で「白バラ」の扱いについては別の授業展開と方法がさらに考えられうるだろう。

ファシズムそのものに対する関心と理解を深めたという点では授業の有効性は実証された。しかし、一方で「戦争と平和」の問題と結びつけて考えさせる・意識を高めるという点では多くの問題点を残した。それらについては今後の課題として、新たな授業化の可能性を模索してゆきたい。

【註】

- (1) R. V. ガイツェッカー、永井清彦訳『荒れ野の40年』岩波ブックレット、1986年、17ページ。
- (2) 千葉県高等学校教育研究会歴史部会編『新しい世界史の授業～地域・民衆から見た歴史像』山川出版社、1992年、16ページ。
- (3) 「十五年戦争」という用語は1968年に、家永三郎氏が『太平洋戦争』の序文で、「太平洋戦争というのは柳条溝事件から降伏に至るまでの、日本と諸外国との連続した一連不可分の戦争を指すのであり、厳密には『十五年戦争』と呼ぶべきものである。」として使用され、歴史用語として導入されたのが始めである。教科書で最初に使用されたのは74年度版の家永三郎『新日本史』三省堂であった。そして歴史教育者協議会においても、この語の感覚、理論的・体系的位置づけが戦争学習の重要な柱となるとして73年より正式に採用している（古谷博「十五年戦争学習の総括」『歴史地理教育』219号、1973年、62ページ）。
- (4) 安達喜彦編『十五年戦争』（平和教育実践選書2）桐書房、1990年、20ページ。
- (5) 安達喜彦「近現代史学習の課題～戦争と平和の学習をどのようにすすめてきたか」『歴史地理教育』293号、1978年、26ページ。
- (6) 「アジア太平洋戦争」の呼称は、家永氏の問題提起を受け、1984年の大阪歴史科学協議会で副島昭一がこのように提起したもの。その後、多くの現代史研究者・歴史教育者に支持され、次第に市民権を得つつある（歴史教育者協議会編『アジア太平洋戦争から何を学ぶか』青木書店、1993年、14ページ）。
- (7) 歴史教育者協議会編『抵抗をどう教えるか～第二次大戦下のフランスのレジスタンスと日本の反戦運動』教育史料出版会、1993年、161ページ。
- (8) 歴史教育者協議会編、前掲書、162ページ。
- (9) *Gewalt und Gewissen, Willi Graf und "Die Weisse Rose."* Eine Dokumentation von Klaus Vielhaber in Zusammenarbeit mit Hubert Hanisch und Anneliese Knoop-Graf, Freiburg, Basel, Wien, 1964, S. 98（中井晶夫、佐藤健生訳『権力と良心～ヴィリー・グラフと「白バラ」』未来社、1973年）
- (10) Christian Petry, *Studenten aufs Schaffot. Die Weisse Rose und ihr Scheitern*, München, 1968, S. 147（関楠生訳『白バラ抵抗運動の記録～処刑される学生たち』未来社、1971年）
- (11) 山口定『ファシズム』有斐閣選書、1979年、28ページ。
- (12) 池田浩士『抵抗者たち』TBSブリタニカ、1980年、238ページ。
- (13) この実践は、茗溪学園中高等学校の協力を得て、平成6年10月25日に高3の世界史選択クラスを対象に実施したものである。

*教材化にあたっては主に以下の参考文献を使用した。(註に挙げたものを除く)

- 1) 草森紳一『ナチス・プロパガンダ絶対の宣伝②～宣伝の人間の研究ヒトラー』
番町書房, 1979年
- 2) I. ショル, 内垣啓一訳『白バラは散らず』未来社, 1964年
- 3) H. ショル/S. ショル, 山下公子訳『白バラの声』新曜社, 1985年
- 4) J. テーラー/W. ショー, 古田八岑監訳『ナチス第三帝国辞典』三交社, 1993年
- 5) 中井晶夫「白バラ抵抗運動の意味」『ソフィア』20-4, 62～75ページ, 1971年
- 6) 中井晶夫『ヒトラー時代の抵抗運動』毎日新聞社, 1982年
- 7) A. ヒトラー, 平野一郎・将積茂訳『わが闘争』全二巻, 角川書店, 1973年
- 8) W. ホーファー, 救仁郷繁訳『ナチス・ドキュメント』ペリかん社, 1969年
- 9) H. マウ/H. クラウスニック, 内山敏訳『ナチスの時代』岩波新書, 1961年
- 10) 山下公子『ミュンヘンの白いバラ』筑摩書房, 1988年
- 11) Karl-Heinz Jahnke, *Weisse Rose contra Hakenkreuz*. Frankfurt/M., 1969
- 12) Michael Verhoeven/Mario Krebs, *Der Film Die weisse Rose*. Karlsruhe, 1982